
まじっく

かいん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじっく

【Nコード】

N2035Z

【作者名】

かいん

【あらすじ】

元ひっきーの娘が謎の少年と出会う物語。

何でもありな魔法世界と制約だらけの現実世界を行ったり来たりします。

元引きこもり主人公と一緒に電脳世界の創造主を探してください。

序章

序章

010

かつてあなたの作った世界が、当時の私のすべてでした。

それ以前の私は、まるで寝たきり老人のような生活。

コンビニに行くことすらままならず、殆どの時間を自室で何もせず過ごす毎日。

友人はおらず、宅配業者と交わす会話ですら声が震えた。

買物物は親任せ。完全な対人恐怖症。

そんな私が、あるときあなたの世界に触れたのです。

自らを鍛え、自分で稼ぎ、他人と協力して何かを為す作業。

そのすべてをあなたの世界から学びました。

その世界で私は、賢者、偉人とすら呼ばれるようになりました。

そんなとき、あなたの抱えている問題を知りました。

こんなに私を救ってくれたあなたを私が放っておけると思っ？

いえ、ごめんなさい。押し付けがましかったですね。

素直になります。

おそらく私は、単にあなたの助けになりたかったのです。

こんなに私を勇気付けてくれたあなたの世界に、行動で感謝の意を示したかった。

え？ いや、あの、その、つまり……

要するに私は、あなたに恋していたわけです。

狩場

011

街から程近い初級者向けの狩場。

広葉樹がうつそうと茂る森の中にできた小さな広場には、ところどころに切株が残る。そこにうず高く積みまれた雑魚モンスターの屍骸の山。まだ知り合って間もない私たち8人が仕留めた今日の成果だ。

バウンティーハンターのドヘルガンとベクティムは屍骸の山を指差し、まだ初心者である私たちに重いペナルティーを課してきた。

「てめえ等が初心者だってことは分かっている。この辺りを俺達の縄張りとは知らなかったんだろ？ 狩り散らかしたことを反省してらってののか？」

ベクティムは十数メートルもある鞭を弄びながら舌なめずりをし続ける。

「だがな、初心者だからって許されていい事とそうじゃない事がある。この場合は後者だ。分るか？ ああ?!」

私自身、ドヘルガンとベクティムの悪評は酒場で散々聞かされていた。のに、奴等の縄張りについては理解できていなかった。未熟な私たちはいつの間にか奴等の狩場に踏み込み、その逆鱗に触れてしまったのだ。

勿論、ゲーム内では何処で誰がどのように狩りをしようが自由だ。私たちは街から最も近いこの狩場で機嫌よく狩りを楽しんでいた。管理部からも何一つ文句の付かない模範的プレイヤー、のはずだった。

ドヘルガンとベクティムが腹を立てているのはあくまで身勝手自分勝手。狩りの独占というよりも、うがった見方をすれば初心者に因縁をふっかけて少ない有り金を巻き上げようとしているように見

える。

今回の狩りに参加したのは私を含めて8名。そのすべてが初心者で、純粋に経験値や通貨ポイントを稼ぐのが目的だった。8名全員が貧弱な防具と武器装備。魔法も殆ど覚えていない。

ルピナ。

世界初のフリースタイルオンラインゲーム。その自由度の高さはそれまでのゲームの比ではなく、翻訳系アプリケーションに優れ、たちまち全世界に大量の熱狂的ファンを生み出した。

それまで引きこもりで友人も生きがいも無かった私はたちまちルピナの世界に魅了され、一日の大部分をこのゲームに費やすようになった。最初は恐る恐るだったゲーム進行にもすぐに慣れ、一緒に狩りをしてくれる者たちに声をかけることも出来るようになっていった。現実社会では近所のコンビニで買い物することさえ恐怖なのに。

ゲーム世界で、私は当たり前前のコミュニケーションに触れ、失っていた何かを取り戻しつつあった。しかし、どんな社会にも悪辣な奴等はいらるものである。

「いつもならな、金置いて行くだけで帰してやってもよかつたんだが、あいにく今日は俺もベクティムも虫の居所が悪くてな」

もともと無事で帰すつもりなど無いな、と私は直感的に思った。

ベクティムは得意の鞭をこれでもかと誇示し、その辺の木の枝や岩を破壊して見せた。

私たち8人は為すすべなく怯えるのみ。全財産投げ出そうが、丸裸になるうが、最早許されるすべは無いかに思われた。

ベクティムは怯えた子犬を見つめるような支配的な視線で、音速の破壊音を周囲に響かせ続けている。奴が今欲しているのは金でも謝罪の言葉でも無い、いたぶり殺す快感だけなのだ。私は心の底で理解した。勝手に膝が笑い始めるのをなんとか抑えつけ、仲間と周囲の様子を伺う。

このゲームの大きな特徴の一つにタッチスキインターフェイスの採用がある。

通常のヘッドセット以外に両手首の触覚センサー、これらすべてを合わせてマルチインターフェイスと呼ばれている。視聴覚インターフェイスが立体的な音声や画像を脳内に構築するのはもうすでに当然として、秀逸なのは触覚である。

人の病態の一つに連関痛というものがある。心臓に疾患があると肩こりなどと勘違いして原発疾患の発見が遅れたりする厄介なものだ。タッチスキインターフェイスはこの皮膚感覚錯誤を逆利用。刺激の強弱と移動速度をコントロールすることでどんなに狭い範囲からでも、つまり両手首のセンサー設置面からだけでも、全身のあらゆる部位の触覚痛覚を殆ど再現できる。触覚痛覚においては約93%。同様の原理で嗅覚味覚もそれぞれ43%、56%がタッチスキインターフェイスのみで再現可能となっている。

ベクティムの鞭がひときわ大きく唸り、私の右隣のシーフが大きく後方へ吹っ飛んだ。瞬間、生暖かい血飛沫が私の右顔面を濡らす。私は震えを抑え、自分が今置かれている状況を脳味噌の一部でなんとか冷静に判断しようと努力した。ベクティムを刺激しないよう細心の注意を払って身構える。

何とか隙を見てやられたシーフを視線の端に捉えると、特大スプーンで抉り取ったような喰いさしの頭蓋がそこにある。抉られた頭蓋くぼみの中央に高さ10センチほどの鮮血の噴水。途端に私は見ってしまったこと自体を後悔し、自らの好奇心を恨んだ。喉の奥から酸っぱい物がこみ上げてくる。

タッチスキインターフェイスの欠点はその長所と表裏一体。苦痛に伴う恐怖まであまりに忠実に表現されてしまうため、死に行く者にとってそれは既にヴァーチャルを超えている。耐性の無いものが高感度センサーを身に付けると受けた苦痛がトラウマとなって残ったり、時には死亡してしまうこともある。よって日本国内で市販されているマルチインターフェイスは厚労省によってリミッターが

かけられている。しかし、このリミッターをそのままにしてゲームを続けている上級者は殆どいない。センサーの反応速度と反応性は魔法や武器の使用精度に直結するため、皆独自にリミッターを外し、もしくは感度を上げ、またはそういった改造が為された外国製品を自ら並行輸入し、ゲーム内で使用している。感度向上によってレベルアップは格段に加速されるが、その分被害を受けたときのショックはプレイヤーを直撃し、心臓や精神に負担をかける。

「ミニカ、左後方に小路がある。合図したら一緒に走るぞ」

やられたシーフとは反対側、私の左隣にいた斧使いが小声で私の名を呼び、逃走を誘う。周囲はうっそうと茂る広葉樹林。左後方には斧使いがたつた今指示した小路が行く先不明のジェットコースターのように口を開けて待っている。

引きこもりだった私がこのゲームを始めてまだ一ヶ月。現実社会で手に入れられなかったものを私はこの世界で沢山手に入れた。知識、社会性、お金、そして友情もその一つ。すべてが初めての体験。あまりの嬉しさに私の感動は行き場を失い、ゲームの開発者にラブコールのファンメールを送ったりもした。しかし、得られるものの総量に比例して凄まじいまでの心的負担をプレイヤーに求めるのもこのゲームの特徴だ。私たち8人が、今はもう7人だが、陥っているこの状況がまさにそれである。

「今だ！」

叫ぶ斧使い。この声に十分速く反応できなかつたことが幸いし、私は生き残った。

駆け出す斧使いの体を後方から這い上がるべくタイムの鞭が上中下に3分割する。まだ3歩しか走っていない斧使いの体が鞭と駆け出す勢いの相乗効果で前方空中へふわりと投げ出される。明らかに斧使いの読み違い。舞う斧使いの首と胴。息絶えた彼の目に浮かぶ意外そうな表情。見る間に血の気が引いていく。噴出す血液は肉片の落ちた場所よりさらに数歩分前方へ撒かれ飛ぶ。駆け出そうとした私は一拍遅れて斧使いの惨状を目撃し、膝の力が抜けてそのま

まその場にへたり込んだ。

腰が抜けた私の頭上を水平に泳ぐベクティムの鞭。そのときまだ立っていた者達が一斉になぎ払われる。肉片と血の乱舞。すぐそこに見えている小路が、海上の不知火か砂漠の蜃気楼のように儚く朧に揺らぐ。

今日ここで死んだ奴等は改造インターフェイスを着けていたのだろうか？ だとしたら相当に危ない。奴等の精神と体力が頑健で、ヴァーチャル死の負荷に耐え、無事復活できることを祈るしかない。気が付くと生き残っているのは女性二人のみ。私と私の横にいる未熟な魔女だけとなっていた。

付いた血液を一振りで払って鞭を巻き取るベクティム。ドヘルガンに至っては最初から得意の片手剣を取り出してすらいなかった。

「おっと、動くなよ。俺達は賞金稼ぎだ。他人の縄張り荒らした罪人が賞金首になる前に処刑したつてだけの話だ。なあ、分るだろ？ そういう意味じゃあ恨みっこ無しってこった。ククク、それに何も殺すのだけが目的じゃねえんだしよ」

「ゆ、許してくれるの？」

未熟な魔女が叫んだ。怯えきつた目に震える体。通常のインターフェイスでもトラウマが残ってしまいそうな繊細なキャラ。

「だからお前等2人だけは殺さずに残してやったんだろうが。俺達の慈悲に感謝しな」

一瞬、希望に輝く未熟な魔女の瞳。が、それをあざ笑うかのようドヘルガンの含み笑いが周囲に広がる。

「くつくつく……いい加減にしてやれベクティム。これから起こることに何の予定変更も無いんだ。お嬢さん2人に余計な望みを持たせるんじゃない」

ドヘルガンの一言が私たち2人の希望をあっけなく打ち砕く。

「余計なこと言ってるのはためえだろドヘルガン。持ち上げてから落とす。このロマンが分んねえのかね？ フン、まあいい……」

それを聞いた未熟な魔女と私は安堵の表情のまま凍りつく。

「お前等2人とも武装解除してその場で素っ裸になりな」

ベクティムは素に戻り、私たち2人に無慈悲な要求を突きつける。すでに鞭を仕舞ったからといって、今の私たちでは2人がかりでもベクティムを倒すことは出来ないだろう。さらにその後ろにはドヘルガンが控えている。

「さっさとしねえと両手足切り落として言うことを聞かすことになるぞ、ああん？」

未熟な魔女は、私の方を伺う余裕も無いほどに追い込まれている。私たち2人はこのままこの獣どもに弄ばれて終わりなのか？ さらに身包み剥がれて遂には殺されるのか？ 他の6人の仲間のように

……

私は懐の煙玉を探った。今日はまだ一発も使っていない。まだたつぷりとストックがある。こいつを使って逃げ延びることが出来るだろうか？

とんでもないクズ野郎だがベクティムの鞭の腕は本物だ。煙で目くらまししたからといって、あの十数メートルの射程域から逃られるのか？ 逃げおおせるには何かとてつもない幸運が重ならなければ無理だ。

「動くなよ。じっとしてりゃあ痛くはねえんだからよ……」

ベクティムのどろりと濁った目が私たち2人を舐めまわしながら、一歩、また一歩と近づいてくる。

差し出された薄汚い手。凍り付いて焼け焦げて、蛆に喰われて腐れ落ちろ！！ 私は心の中でありつたけの呪いを浴びせかけた。魔法ですらない呪いの言葉にはもちろん何の効力も無い。私は今度は自分自身の低レベルと無力をも呪った。

「うががががああああ…… うぎ、ぎぎ、ぐぐ……」

突然叫びだすベクティム。慄然とするドヘルガン。

「うがくそうつ、お前等何しやがった、く、く痛、つつ……」

ベクティムの腕を侵しているのは大魔法『マニテュオバクール（魔の過冷却）』の冷気だ。未熟な私が見るのは今回でまだやっと2

度目。この大魔法を唱えられるものがここには誰も居ない、にも関わらず、魔法は突如降ってわいたようにベクティムの腕を侵し始めた。

私はこの好機を逃さず、煙玉を一つ炸裂させると未熟な魔女の前腕を引っつかんで先程の小路の方へ駆け出していた。

5歩… 10歩… まだ鞭の唸りは聞こえない。

私は続けて2個3個と煙玉を炸裂させつつ、前傾姿勢で駆け足を早める。今掴んでいる腕にちゃんと魔女の全身がくっついて来ている事を祈りながら。さらに4個5個と後方にばら撒く。

血溜まりを飛び越え、林を抜けて草原に出る。後方を振り返るのが怖い。スピードは落とさず、未熟な魔女の体勢を整えつつ2人でさらに走る走る。

先程居た森が遙か彼方に見える。小高い丘の上に達したとき、私たち2人は草むらに突っ伏して倒れた。息切れが収まらない。

逃げ出す過程で私は、仲間と協力することの大事さと互いに足手まといになるリスクについて嫌というほど思い知った。おそらく隣で息切れしている魔女も同じだろう。協力するときはし、必要ならば個別に動く。命を失わずしてこの大事な教訓に気付けてよかった。マルチインターフェイスは草原で仰向けに転がる私に風のそよぎと生き残った感動を伝えてくれている。

ドヘルガンとベクティムの賞金稼ぎ2人はもう追って来ない。

殺された仲間達のうち何人が高感度インターフェイスを使っていたのだろうか。彼等の後遺症などが残らないことを祈るしかない。

ベクティムの腕を止めたのは一体誰だろう。それともあれは魔法ではなく、ベクティム自身の持つ病だったのだろうか？

いやしかし、肉体が内側から凍りつく病など考えられない。答えの出ない問題を棚上げし、私は空を見上げた。

隣では未熟な魔女が死んだように眠っている。そういう私も魔女であり魔法使いなのだが、まだまだ職業を名乗れるようなものではないと今日の一件で思い知ってしまった。

それから数年の月日が流れた。

三二カ

1 + 1

アロウの街から数十キロ。

タスクを達成するために訪れた密林の奥地で私は予定外の地下空間に迷い込んだ。

タスク自体は軽いものだった。私のレベルなら難なくこなせる程度だ。

それにしてもどこだここは？

完璧なはずの私のマップにもいまだ載っていないダンジョンか、それとも次元のひずみか。

大剣ワルギスを振り回せばゴブリンやオークをひと薙ぎ。唱える呪文は最上級ばかりで並み居る魔法使い達も皆揃って恐れおののく。

この世界での私を一言でいうなら『無敵』。

これでほぼ間違いない。

その私が自分のいる場所すら把握できないというのはいったいどういうことなんだ？

つい先ほどもらったタスクを軽くこなし、帰ろうと振り向いたら急に足元が崩れた。気がついたら真つ暗闇で、どうやら目の前には人が倒れているらしい。先ほどからピクリとも動かないし、他に気配を感じることも無い。暗闇でかつ静寂だ。とりあえず魔法で周囲を照らすことにする。

「ルミナスッ！」

明かりの呪文によって周囲は一瞬でまばゆい光に包まれた。

少し光が安定してくると、マントに包まれた魔法使いとも僧侶ともつかぬ男が一人、すぐ目の前に横たわっているのが見えた。周囲

は思ったより広い。ただの地下空洞というわけでもないらしい。

壁には一定のパターンで模様が見えるが、人為的なものかどうか判別がつきがたいほど表面が荒れている。ただの地層なのかも知れない。それにしても綺麗に空洞が開いたものだ。ちょうど人の身長プラスアルファくらいの高さで縦横もほぼ長方形。人為的なもので無いとしたら驚くべき自然の悪戯だな。

「おい、起きろ」

私はつま先で倒れている男を突いてみた。この世界ではこういう罨がよくある。

いつでも反撃できる態勢を取りつつ男を起こそうとしてみる。

3回ほどつつくと男は呻いて身を起こした。

見た目は20歳前後。年齢にそぐわぬ高価そうな宝飾に年季の入った魔法道具。その上から埃にまみれた黄緑色のシルクのマントと、うちぐはぐなスタイル。

私は男の格好をあらためて見て思わず吹き出した。何者か知らないが、悪辣な連中の一味では無さそうだ。

「それなんて格好？ そのマント、ひよっとして元はパーティー用？」

「ん、うう、オリジナル……かな。ああよかった、生きてる……」

「私はミニカ。この世界で最高ランクを極めた何でも屋の大魔法使いよ。あなたは？」

「僕はトニー。なんて言えばいいのかな、ええと、修行中の魔導士だ」

トニーは埃を払いながら立ち上がった。なんと彼の背は私より3インチ以上も高い。女魔法使いの中ではかなり大柄な私が、立ち上がった彼を完全に下から見上げる形になった。

「良かった。間に合ったか」

トニーは溜息をつくように言った。

その直後、頭上で凄まじい爆音が響き渡った。

壁の表面は崩れ、砂埃が舞う。私たち2人はその場でよろめいた。

「どっぴいっこと？ こ、これ……きゃあ……」

トニーは、戸惑いよるめく私の両肩を支えるようにしっかりと抱いた。まるでこの爆音を予想していたかのようだ。

「私がついさつきタスクをこなしたときには何の前触れも無かったわ。あなた何か知ってるの？ この世界は……」

私はトニーに事情を聞こうとしたが、ますます大きくなる地鳴りと轟音の中、声がなかなか通らない。自分が把握していないダンジョン内で、素性のよく分らない相手に必死で状況説明を求める偉大なる魔法使い。それだけでもう十分滑稽だ。だが分らないものは仕方が無い。

私は揺れる地面に両足を内股に踏ん張り、トニーの胸に顔を埋めて少々ヒステリックに情けない問いかけを繰り返した。

「バカ、もう、ホントに怖いんだから！ 早く説明しなさいよ。わわ、キヤー」

彼はそんな私の背中に手を回し、抱き寄せたまま後ろ頭をかきあげるようにそつと撫でる。

「もうそろそろ終わると思うよ。危ないところだったね」

彼の声はあくまで落ち着いていて、優しい。

私は彼の胸に埋めて顔色が見えないのをいいことに、大いに赤面した。最強の魔法使いなのにあんな軽い悲鳴を上げちゃった。バカバカ私のバカ。大魔法使いの威厳が台無しだよ。もうやだ。やだやだ。

まもなく爆音は聞こえなくなり、地鳴りや轟音も静まった。

私が最初にかけてた明かり魔法はまだ薄っすらと周囲を照らしている。

トニーは私を抱きしめたまま細面色白の顔をこちらに向けて軽く微笑んだ。包み込むような笑顔だ。

「バ、バババ、バカね。ちよつと足場が悪かったから掴まっただけ……」

私は押し退けるように彼から離れた。なんだこのツンデレキャラ、

私らしくねえ。明らかに最高位魔法使いの貫禄にそぐわない。これまで積み上げてきたものがあ……

「トニー、お願いがあるんだけど。さっきの悲鳴、聞かなかったことにしてくれない？」

私は上目がちに懇願する。もう貫禄なんて何処へやら。

「いいよ」

トニーは子犬をあやすような笑顔で答える。

それにしてもこの男、あれほどの大爆発でも落ち着きはらったこの態度。この私ですらこんな大異変これまでに遭遇したこと無いのに。

地上に出ると背筋がうすら寒くなるような焼け野原が辺り一面に広がっていた。これじゃあ無敵の魔法使いでもひとたまりも無い。もしあの時この場にいたら間違いなく即死だ。

変なファクションの優男は、期せずして私の命の大恩人となった。「見たことも無い殲滅型の魔法ね。どちらかというと天災に近いわ。個人やグループで生み出せるマジックパワーとは桁が5〜6個違う規模。トニー、どういうものなのか説明できる？」

「ああ……ん、知らないよ良くは」

トニーは私と目を合わさずに答えた。

「ただ、とある筋から今夜大規模なPKがこのあたりで行われるって知ったんだ。でも僕最近この世界に来たばかりでさ、勝手がよく分らなくて。しかも、時間も無くてかなり焦っててね。そんなわけで格好もこんなで……」

トニーは取りとめの無い返答をした。

「それよりも助かって良かったじゃん。ね、ミニカ、街に連れて行ってくれるかい？今はアロウの街のトリッシュの酒場がメインのタスク配布ポイントになってるんだろ？」

「来たばかりなのに詳しいのね。予習でもしてきたの？」

私は、アロウ周辺では傍若無人冷徹残酷な魔法使いで通っている。

その風評を気にしたことは無いし、誇りにすら思ってきた。でも、このトニーにだけはそんなあるがままの私を知られることに少し抵抗を感じる。初めてだ、こんなことで胸がドキドキするなんて。

「わ、私は一匹狼の魔法使いだから紹介できるような仲間なんか殆どいないけどね。まあいいや、疲れたしもう戻ろうと思ってたところ。一緒に行く?」

「うん、頼む」

「ああ、それと……」

「え?」

「さつきは命拾い、ありがとうございました」

落ち着いた私は少しおどけた調子で御礼を述べた。

周囲は夕闇に包まれ足元もおぼつかないが、凄まじい魔法力で焼き払われた周囲にウエアウルフー一体スライム一匹いないことは明らかだった。

普段なら警戒しながら慎重に進むべき夜の道を私たち2人は時には冗談を言いつつ話しながらのんびり帰った。

まもなく私達はアロウの街の大きな外門にたどり着いた。

外門には荒野から来る人外が近づけないように多種多様なまじないがびつしりと巻きついていて。ざっと30種くらいはあるうか。このうちの5、6個はギルドからの依頼で私自身がかけたものだ。痛んではいるが、まだきちんと機能している。

外門から少し歩くと小さな内門があり、そこから程近いところにギルドの集会所にもなっているトリッシュの酒場がある。

扉を開けると酒と煙草と硝煙の臭いがスモークでも焚いたかように溢れかえってきた。

「ミニカ、おめえ無事だったんだな。心配したぜ」

野太い声が店の奥から響き渡る。酒場のマスターで情報屋でもあるガウが髭面を掻きながら声をかけてくれた。

ガウは巨人族とも見まごうばかりの大男。

一匹狼の私だが、このガウにだけは少し心を許している。一見粗雑に見えるが実は細かなところに気がつく人の良いオヤジだ。

「ああ、危なかったがね。このトニーがいなけりゃ灰も残っちゃいなかったかもな」

私は厳しく声のトーンを落として、横にいるトニーの肩をポンと叩いた。

「ずいぶん大柄だが職種はなんだ？ よけりゃあうちのギルドに入んねえか？」

私への心配は一瞬で終わり、いきなりトニーの勧誘を始めやがった。ちゃっかりしたオヤジだ。ガウは私のことをトニーにどういう風に話すつもりだろう。別にどうでもいいんだが、なぜか気になっ
て仕方が無い。

「ガウ、か……」

トニーの目からは先ほどまでの微笑が消え、心中探るような鋭い視線がガウに浴びせられた。

「はあ？ なんだお前さん。俺とは初対面じゃなかったか？」

ガウはトニーの変化に少し戸惑っているようだ。

「いや、何でも……」

トニーはガウから目を逸らし、下唇を噛むような仕草をする。彼はそれきり言葉を切り、値踏みするような視線で店内を見回し始めた。ギルドに登録したりタスクを貰ったりする様子も無い。

「おいミニカ、ちよつと来い」

ガウが私の手を掴んでカウンターの奥に引つ張り込んだ。

「いててて、呼べば行くよ。引つ張るなよ」

いくら女魔法使いの中では大柄でも、私の腕はガウの数分の1ほどの太さしかない。いつも思うがこのオヤジ、ギガントの血でも入ってるんじゃないのか？

「俺は見覚えねえぞこの兄ちゃん。いつてえ何者だ？」

「知らないよ。私も今日初めて会ったんだ。おかげで命拾いしたんだが」

「おうよ。心配してたんだ。超ど級の爆発だった。オレがお前に渡したタスクとちょうど同じ方角同じ頃合いだったしな。お前が店のドアを開けて顔見せるまでは、ずっと冷や冷やしてたんだぜ。んでクリアはしたのか？」

「タスク自体は楽勝だったよ。つか私のレベルでクリアできないタスクにもう長いことあたつてない。それにしてもあの爆発は凄過ぎだ。トニーのいた地下空間がシエルターの役割を果たして命拾いしたが…… 地上にはもう何にも無くなって、そりゃ綺麗なもんだつたよ」

私は疲れた顔で微笑んだ。

ガウは少し私に調子を合わせたが、すぐ真顔になり、トニーの話に戻った。

「あいつちよつとおかしくねえか？ ノンプレイヤーキャラじゃねーよな？」

「まさか。普通に会話してたんだよ」

「ならいいが。最近は色んなパターンがあるからな」

「ミニカ、ガウ…… ちよつといいかい？」

いつの間にかトニーがこちらに向いて声をかけている。

「用事が出来たんで今日はもう落ちるよ。今度いつまた来れるかわらないけど、寄れたらここにも寄るね」

そういう間にもトニーの影が薄くなってきた。

「ああいいよ。いつでも来な」

ガウは事務的にトニーを見送った。

「待つてトニー、私は……」

急いで声をかけたがトニーの体はもう向こう側が透けて見えている。声も途切れ途切れにしか聞こえない。

「また…… ニカ。また今度ゆつ……話……う。僕……」

トニーはフェードアウトした。

リアルタイムはもう午前3時を回っている。周囲を見回すと酒場からは急速に人影が減っていた。

「まあまたこいやミニカ。次回以降はタスクも重めだ。時間かかるぞ。集中して来られるのはいつごろだ？」

「気付けばガウも少し眠そうだ。」

「来週再来週は休みも多いし、主な用事は午前中に集中させるから大体いつでも」

「分った。俺ももう落ちる。キッドに代わるぞ」

そう言うのとガウの影が薄くなり、代わりに緑色の衣装をまとったかわいい子供の画像が現れた。

キッドは自動でタスクの割り当て、経験値管理、クリアタスク管理、アイテム保管、イベント運営などを行ってくれる総合窓口。ガウが酒場の情報屋としてカウンターに立てないときに代わりを務めてくれるノンプレイヤーキャラだ。

「最近はそのまま寝こけること多かったからな。今日はちゃんと帰ろう」

私は独り言を言いつつ人影まばらになった店内に別れを告げた。

数時間前にあった爆発はもう遙か昔の出来事のように淡い意識に包まれつつあった。

早朝参加の連中がポツリポツリと店内に姿を現す。

粗野な声が店内に飛び交い、キッドがそつなく彼等にタスクを配ってゆく。

世界は回り続けていた。

リアル

1 + 2

けたたましく響くベルで明け方の夢は悪夢に変わる。

ガンガンと割れそうな頭をかかえ、止めた目覚ましの文字盤を覗き込んだ。

「げ、今止めたんじゃないの？ この目覚まし、何で30分以上もタイムラグがあるのよ？」

7時半に仕掛けたはずの目覚ましはもう既に8時を回っている。

止めた状態で意識を失い、その姿勢のまま30分の時が流れたようだった。

いや、もう何度目だこの現象！

明け方4時にログアウト。そこからウイルスチェックとデフラグを初めていつの間にか意識を失った。ベッドに潜り込んだときの記憶は綺麗さっぱり消失している。

最終的に寝たのは何時だ？ 自問自答しながら歯磨きと洗顔と朝食と着替えを同時にこなす離れ業。このトーストなんか味がスースーするよ。

「あ、パソコン落とししていかなきゃ……」

つい先月、勝手にファイル交換ソフトをインストールしてばら撒くというとんでもないウイルスに見舞われて、パソコンがぶっ壊れたとこなんだ。

まあクレジットカードはなんとか無事だったし、ただの愉快犯だったみたいだけど、安月給でそうそう突発的な出費があつては生命の危機。

それにしてもウイルスダスター役に立たねえ、訴えるよっ！
テレビを点けるとこれまたハッカーの報道。

困った奴等だけど人が死ぬわけでもないし、ゲームのチート探したりするのにも一役買ってる人たちだから、徹底的に恨む気にもなれない。

頼むからほどほどにやってくれ。

私の名前は、あさくら みにか浅倉小娘。

変な名前だろ？

親が遊びで付けたとしか思えん。70歳になっても80歳になっても小娘ミカだぜ？ ふり仮名ないと誰も読めないし。

読み辛い名づけするのが流行ったのかな？

ただいま18歳で今月から一人暮らし。

身長低し。顔は美人……じゃないけど不美人でもないと思いたい。だれかそういつてくれ。念のためたのむ。

正直、中学までの私は最悪だった。病弱でチビ。友達いない、話下手、根暗の五重苦。

その所為で中学高校の半分は引きこもり。なんとか卒業できたのが不思議なくらいなんだ。実は今でも人前じゃあダメダメ。あがって声が震えちゃう。

しかしまあそのおかげと言っちゃああなたが、ネットゲキヤラのレベルは上がりまくり。

余計なお金は一銭も使わず、一からその世界最強レベルまで引き上げたのは実は私一人くらいしかいないんじゃないかな？

おかげで大量にタスクをこなして、ゲーム内では大金持。

あと、ホントはやっちゃいけなかったんだけど、リアルマネートレードって知ってる？

ゲーム内のアイテムや召喚獣を現実のお金で売り買いするの。

なんせその世界最強レベルだから最後の方は面白いようにレアアイテムが手に入ってる。

ここだけの話、1年で150万円くらい儲けたんだわ。

だって元はタダだよ。たしかに死ぬほど時間を費やしてはいるけ

ど。

引き受けるタスクは後になるほど難易度上がるから、殆ど私のキヤラじゃなきゃクリアできないようなのばっかだったな。

それで、貯めたお金でさ、一念発起したわけ。このままじゃ駄目でしょ、一人暮らしでしょやっぱ、って。親はびっくりしてたけど、貯めたお金のことは言わないで、ちよっぴりだけ援助してもらって、ワンルームマンションに引っ越したわけ。

自分でもびっくりだよ。

でも、たとえネトゲでも、引きこもりの高校生が一人で150万も貯めたのはなんか自信に繋がったんだと思う。

だから一人でもやっていけるって、なんとか踏み出せたんだ。

これからの目標は、ゲーム内で得た自信を足がかりにリアルでも自信を持つこと。最初にこのゲームを作ってくれた人には今でもホント感謝している。

リアルの私の仕事は派遣社員。

ソフトウェア開発している社員の依頼でコピーを取ったり資料を整理したりする人にお茶を入れたりする仕事。

え？ 良く分らない？

要するに雑用係のそのまた下ってこと。

月給は10万ちょい。

だから今でも夜間は大魔法使いとして稼ぎまくらなきゃいけないし、そのせいで毎朝目覚ましの前で行き倒れの旅人みたいな姿勢になってるわけ。

派遣の仕事はまだやり始めたばかりだし、今からリアルでもレベル上げしなきゃ。

「おはようございます」

突然背後から元気の良い声。

「お、おはよう……」

リアル社会での私の声はなんて小さくて元気が無いんだ。
ゆっくり振り返ると後輩の椎野君が立っていた。

後輩といっても、私は3月下旬採用、彼は4月上旬採用で10日
余りしか違わないんだけどね。でも先に入って一通り仕事の手順を
教わっていた私はそのまま彼の教育係になったのでした。なんせ仕
事は簡単。数十人いる社員さんのそのまたアシスタントさんのその
下で細々と雑用を聞いてればいいんだから。こんなので先輩気分を
味わえるなんてちょっとお得。引きこもりのおちこぼれがなんと
なく偉くなったもんだわ、ふっふっふ。

椎野君はチビの私なんかより遙かに背が高く、スラリとした細面
で頭がちっちゃい。私にとって彼はトテーモ気になる存在。でも私
自身、まだ自分の思いには自信が無い。

中高の大部分を引きこもりとして過ごした私は、長い間恋人どこ
るか普段会話を交わす異性さえもいなかった。当時の私は極度の対
人恐怖症。

宅配業者や近所のご老人と話すのでさえドキドキして声が震えた。
当時より幾分マシになったとはいえ、今でも他人と話するとき私の心
臓はしばしば駆け足になる。悔しいけどその所為で、私は私のドキ
ドキが恋愛感情によるものなのかそうでないのか分からない。私だ
って女の子なんだ。人並みに恋愛感情だってあるんだ、って信じた
い。

「あのお、椎野さん。午前中はA列B列のならばに付いてもらって
いいですか？」

あゝ、指示するだけなのに声が震えるう。そういえば同年代の男
の子と直接話したのは中学校のグループワーク以来のような……

「はい。分りました。A・Bですな」

良く通る椎野君の声。圧倒されちゃう。

仕事に入ってしまったえば、あとは担当先の指示に従ってただ黙々と
雑用をこなすのみ。

昼は気弱な派遣社員。夜は天地を揺るがす大魔法使い。あゝ、早く帰りたい。

「君新しい子？　こういう記事わかる？」

休憩中の社員さんから突然話しかけられた。最初は誰に声をかけてるのかよく分らなかったが、新しい子って私と椎野君しかないし。

「はい？　いえ、あの良くは……」

なぐんで返事するだけで声が震えるんだ。まったくもう私の意気地なし。

記事は今朝テレビで見たハツカーのものだった。

「俺達の仕事ってどんなかわかる？　あんま詳しくは言えないんだけどさ」

上手く返事できないが、社員さんの聞きたいことはなんとなく分った。

「俺達の仕事ってこいつらと戦うことなんだよね。もしくは有効な予防線を張ること」

おお！　ひょっとして私今すごいことを教えてもらおうとしているんじゃないかしら。

「宇賀さん達のお仕事が、ハツカーと戦うこと、ですか？」

私は慌てて目の前の男性のネームプレートをチラ見し、会話に生かした。

宇賀さんは少しやせ型でメガネにボサボサ頭の、30歳前後の男性。見た感じ典型的なシステムエンジニアだ。

「あ、ああ……」

男性は自分のネームプレートを見て納得し、苦笑いした。

「ええと君は、浅倉さんか。そうだよ。俺達は全世界の天才たちと戦ってるのさ」

「天才って、ハツカー？」

「俺達のチームは総勢50人、君たちも入れてね。一般的で汎用性

が高い、改変が容易で、解除されにくいプロテクトを開発してるのさ」

「物凄く重くなりそうですね」

素人の私が聞いても難題に聞こえる。

「俺達の仕事は理論図とフローチャートを作ってテストプログラムを走らせること。残りは解除手法を開発するチーム。いたちごっこをチームの中でやってるわけだ」

「どのくらいで出来るんですか？」

「いま、有効だと思える方法が15種ほど挙がっている。いまから一ヶ月で50種まで増やし、それをまた25種ほどにまで絞り込む。そのうちの3〜5種を組み合わせ一つのプログラムに組み込む。組み込み方はランダムだし、ダミーも混ぜる」

「それでももうハッカーを防げるんですか？」

「いや、無理だろうね。時間は稼げるかもしれないが」

「破られたらどうするんですか？」

「また作るよ。人間が作るものだからね、絶対は無い。相手はプログラムジャンキーみたいな連中だし、俺達が作ったデータを遡って解析してくるよ」

「大変なお仕事なんですね」

めったに聞けない仕事の内側を教えて貰い、私は興奮した。

「時間稼ぎだね。これで仕事になってお金もらえるわけだし。絶対完璧なプロテクトなんかが開発されたら逆に俺達が干されちゃうよ」
宇賀さんは軽く笑ってコーヒークップを置き、手を上げて自分の席に戻っていった。

「あ、そうそう」

席に着く手前で宇賀さんは私の方に向けて思い出したようにいった。

「ある有名なネットゲーム上で妙なアクセントがあったんだ。友人に開発者がいるんで問い合わせてみたんだけど良く分らないって言うんだよね。天変地異か核爆発みたいな現象なんだけど、そんな

イベントの設定は無いって言うんだ」

「天変地異か核爆発……？」

私はドキツとした。

「もちろんゲーム内での話だよ。俺はそのときたまたまログインしてたんだけど。みんなが集まる酒場で、そのときはじめて見かけたキャラの名前が……」

心臓が口から飛び出てきそうだった。

「トニーって言うらしいんだけど」

え……？

「それ、いま売り出し中のハッカーと同じ名前なんだよね」

マジですか？ 心臓を啜えたまま背筋に氷を当てられた、そんな気持ち。

「まあ、でもありがちな名前だし、関係あるかどうかは分んないけどね」

「そ、そうですね。カタカナ3文字なんて、被りまくりでしょーし」

「そう思ってアクセスログを確認してもらったんだよ。ほら俺、開発者で管理アクセス権のある友人いるから」

またまた背筋に冷たいものが……

「あの事件の時点でログインしてたのが16万人弱。そのうちトニー名でログインしてたのは8名。そのときの足跡リストで前後1時間以内に酒場にいたトニーは……」

言われる前からもう答えが分ったような気がした。

「ゼロだった」

「酒場にいたトニーは0人だったんですか？」

「その通り。まあでもあのゲームはニックネーム登録も出来るし、ニックネームいつでも変更可能だから。富田さんとかそういう名で登録してて、ニックネーム表示がトニーだっただけかも知れないけどね」

「あ、そう、そうですね。毎回ニックネーム変える人とかもたま

にいるみたいだし、ややこしいっいたらありやしない」

そう言いながらも冷や汗が止まらない私。もうやめて」

「え？　なんか浅倉さん詳しいみたいだけどそのゲームやったことあるの？　まあとにかくハッカーのトニーと同一人物かどうかは分らないけど、ニツクネームよく変える奴はPKの可能性が高かったりするし、もしやってるなら近づかない方がいいかもな」

やってるものにもこのゲームに関しちゃプロ級、最上級魔法使いだよ。年収150万で本業より儲けてるよ。その辺のPKプレイヤーなんかチヨチヨいのちよいでボッコボコだよ（笑）しかし、なんか引かれそうで素直にカミングアウトできないのが辛い。もと引きこもりの悲しい性か……

「ところで変わった名前だけど、浅倉さんって下はなんて読むの？」

「あ、ハイ、あの、ミニカです。浅倉あさくら小娘みにか……」

「へ、じゃあ今度からスカートはミニはいてきてよ」

宇賀さんは少し考え込む素振りを見せた後、ニヤニヤしながらそう言って自分の席に戻っていった。

まだ若いくせに典型的オヤジのノリ。そんなんじゃあもてないよ。それにしても、あゝ疲れた。

まさか会社でネトゲの話が出るとは。しかも昨日の今日じゃん。

あの超有名ネットゲームの管理アクセス権持つてる友人が身近にいるなんて、さすが業界人は違うなあ。

ふと時計を見るともう終業時間近くになっていた。

椎野君もそろそろ後片付けに入っている。

さっきまで無駄話ばかりしてた私。そんなふうにはさぼってばかりいる先輩の背中をマジマジと見られてたんじゃないだろうか。

う、早くも先輩の威厳喪失？

「浅倉さん、もうあがるよね？　タイムカード押しとこうか？」

「え？　ああ、ありがと」

ん、たぶん大丈夫。なんか彼十分優しい。

会話の中身は聞こえてなかった？ 上手く今風の若者に見えたのかしら？

でも実際話すと声震えちゃうんだよねー うーんちくしょー
さっきまで心臓が出たり入ったりしてた所為か今日はなんかいつもよりハイテンション。この調子で夜の部もバリバリ稼ぎまくりますか。

タイムカードのお礼を言って帰ろうとするとなぜか後ろから追いかけてくる足音。

おいまさか、社員さんじゃないよな。社員さんは定時帰宅なんか一人もいないんだからこの会社。それどころかマイパソコンと寝具一式持ち込んで寝泊りしてるような人もいるくらい。噂じゃあ殆ど帰らないんで自宅のアパート引き払っちゃったとか引き払ってないとか、もう都市伝説レベル。……てことは、おい、まさか。

「浅倉さん、一緒に帰っていい？」

椎野君だあ、嬉しいはずなのになぜか嬉しくないこのお誘い。人前赤面恐怖症な私。

同じ会社で同期で、帰る時間も同じならそりゃ声くらいかけるわな。しかし元ヒキコモリのこの地味娘に同年代とのまともな会話が出来るのでしょうか……

ああ私ったらなんてネガティブな…… まだおじさんの方がマシだあ。

恥ずかしいよう。何話せばいいの？

「さっき宇賀さんと話してたのちよつと聞いてちゃったんだ。浅倉さんてネットゲームやるんだね」

キター！

「う、うん、ちよつとね」

「へー、見かけによらないなあ。もつと読書とか音楽鑑賞なんかに興味なのかと思ってた。実は僕もやるんだよネットゲ。浅倉さんは何に嵌ってるの？」

キタキタキタキター ここではぐらかすのはあまりに不自然。

「んー、いろいろやるけど。一番は『リーマス』かな……」
言っちゃったー

「あー、あれ、今一番熱い奴だよ。僕もやってる。実はつい最近はじめただけど、浅倉さんはもう固定パーティーとかいる？」

「ん？ うん…… まあね。いつも同じ人たちと回る……かな。それに潜ってる時間もそんなに長くないから、椎野君とはニアミスしてないかもね」

「バツキヤロー！ いつも一人の一匹狼だよ。それでもここ何ヶ月も負け知らずだよ！ パソコン開けてる間中ずっとゲーム漬けの傍若無人冷徹残酷大魔法使い様だよ！」

「し か も うわヤベー ハンドルネーム100%広まってるよ。ハンネ言ったら絶対ばれちゃう」色々とムチャやりすぎたからなー

「こんな日がくるならネット上でももうちょっとおしとやかにしてくんだった。」

「でもそれじゃあ稼げないし。私今、頭の回転物凄く速くなってる気がする！」

「んー じゃあハンドルネーム聞いても分らないかな…… ところで浅倉さんの下の名前って珍しい字面だけど、なんて読むの？」

「し、し、しまったー こんな日が来るなんて思いもよらなかつたから下の名前ハンネそのまんまだよー でも本名教えないうって無理だろ、職場の人間関係上。」

「さつきも宇賀さんに聞かれたんだよね。笑わないですよ。ミニカ……。浅倉あさく小娘ひみにかって読むのよ」

「言った、遂に言った。もう駄目だ。絶対ばれてる。下品で暴虐な大魔法使いの正体がいま解き明かされてしまった。」

「椎野君は何かに気付いた様子で下を向いてぶぷつと小さく噴出した。必死に笑いを堪えているように見える。」

「おいまで、せめてリアクションはこっちに見せてくれ。反則だ。」
「いや、ごめん。なんかこの前アクセスしたときに似た名前の人が

居たような気がしたんで……」

ハイ、それ間違いない私。トリツシユの酒場でもアロウの街でもミニカは私一人しかおりません、ハイ。

ただ『リーマス』の世界は広いから、椎野君がアロウ以外のまったく別のエリアに毎回アクセスしてるなら他にもミニカサンいるかも知れませんが。いまんと同名にはまだ会ったことございません。私の名前が他のエリアにも轟いてる可能性なら十分ありますが。

「僕いま、アロウの街から入ってるんだ」

ほらね。その周囲でミニカは私だけ。ハア」

「このまえすごいアクシデントイベントが発生して、そのときたまいたんだけど」

「それ宇賀さんの話でも出たけど、昨日のことじゃない？」

咄嗟に聞いてしまった。

「よく知ってるね。浅倉さんやっぱりあの場にいたんだ？」

あゝ、やぶ蛇。

そのとき椎野君の名札がチラと目に入った。退社時に外し忘れてらしい。

「椎野君の下の名前もけっこう珍しくない？ 始めて見る字面だけど……」

後で思い返すと、ここらが運命の分岐点だったのかもしれない。

「うん。自分でもそう思う。全国探しても殆どいないんじゃないかな。大きい兄って書くの。椎野大兄って書いて、『しいのトニー』って読むんだ」

さっきまでとは違う角度で、私の脳はまたグルグルと回り始めた。

飲み会×二人

1 + 3

初めてのデートになるのだろうか？

仕事終わりに椎野君と入った居酒屋は24時間営業の明朗会計、極めて健全な食事とちよっぴりのアルコール。

そして、そしてそして、このわけのわからない胸の高鳴り……

……で、待て。

ホントーに、ホントーに恋なのか？ これ。

元引きこもりの私は、近所のおじいちゃんに挨拶するだけでもドキしてたんだあ。ああ、もうほんとに今日はどうなるんだろ。

セルフコントロール、セルフコントロール。

お店に入るとすぐさまお手洗いに直行。お化粧を直すと同時に自分を納得させる材料を探して5分ほど固まってしまった。

話は30分ほど前の、場所は会社の事務所前。椎野君にタイムレコーダーを押してもらった直後にまで遡る。

「し……いの、トニー…… しいのトニイイー??!!」

突然叫ぶ私。目の前の椎野君の頭上に特大の疑問符。

「僕の下、変わってるだろ。多分日本中搜してもそんなにはいないと思うよ」

「た、たぶんいないよ。そうだよ、そう……、……て、そうじゃなくて、あの」

悔しいけど言葉がうまく出てこない。なんでリアル社会じゃこんななんだ私。

我ながら歯がゆくて仕方が無い。がんばれ『リーマス』の大魔法使い！ 今のおまえは五重苦の女の子じゃない。高身長・豪腕で最

強の武器防具と最凶の魔法を使いこなす悪口傲慢な魔法使いだ。

いけ！ 『椎野君、昨日大魔法使いミニカと一緒にいなかった？』
って質問してやれ。

い、いや、そうじゃなくて、そ、そうだ『昨日の夜、どこにいたの？』って聞くんだ。

「ところでミニカ、お腹空かない？ お給料がまるつきり安いんで……課長には聞こえてないよね。そんな大したところには誘えないんだけど、良かったら近所で飲みに行こうよ。もう働いてるし、未成年だとか少しくらい大丈夫だよね」

私が背中に汗かいて必死で言葉選んでるときにこのさわやかボーイは一体いくつの言葉を紡ぎ出してくるんだー！ 私のメンタリテイーじゃ対応し切れないじゃないか。

えーん、もう泣きたくなってきた。

「そ、そうね。少しくらいならね。お、お酒？ の、飲んだことあるわよ。あの、実家にいるときお母さんと一緒に梅酒をちよっぴり……」

あーもう何言ってたんだ私は。

「ならもうとづくに体験者だね。僕は社会人になってからなんだ。アルコールは脳の働きを抑制するって、昔煩く言われててさ。だからお酒もミニカの方が先輩かも」

……て、椎野君、すっかり私のこと下の名前で呼んでるじゃん。もう、余計緊張しちゃうよ」

「そ、そうだね。仕事もお酒も私が先輩でよかったあ。だってだってほら、片方だけ先輩だといろいろややこしいじゃない！」

バカか私は。もっとマシなりアクション無いんかい。やっぱリアルな私は五重苦だあ。

程なく私と椎野君は会社から徒歩10分ほどの大衆居酒屋に着いた。

話の主導権は殆ど彼が握ったままだが、楽しくない訳じゃない。

つか単純に楽しいじゃん。

話題はゲームから音楽や映画など他の趣味へ、はたまた会社や仕事のことまであちこち飛びまくり。つかえながらも私いつもより上手に話せてる気がする。彼のエスコートが上手いのか、私が成長してるのか、もうそんなことどうでもいいや。

とにかくなんかすごい胸が高鳴る……これってひよつとして……
「ところでミニカのハンドルネームって何？ ひよつとしたらごく最近オンラインで会ってない？」

「え？」

浮かれた私に椎野君からの不意打ち。今ここでその話題？ もう流そうと思ってたのに。

会社は明日も明後日もずっとあるわけで、彼とは毎日のように顔合わすわけで、こんなことならもっておしとやかなキャラを演じとくんだった。ハンネ顔見せ無しだからって男勝りにやり過ぎた。ゲーム内とはいえ惨殺も散々やったし。男キャラが引くくらいの残酷非道もしばしば。今彼がそれを知らなくても、ハンネばれちゃえばトリツシユの酒場に来てる他のバカどものおしゃべりでいずれ全部筒抜けだよ。もうなんか涙出てきそう。

「僕この前すごい女魔法使いに会ったんだ。屈強な上に魔法も万能なんだって。そいでもってなんとその人のハンドルネームが……」

あゝマジヤベー、もうだめだ。これ以上隠し通せない。うん
「良かった事！ そうそう、ネットゲやってて良かった事って椎野君
どんなことある？」

いきなりの話題転換。呆然とする椎野君。どんだけ話の切り替え下手なんだわたしや。

「うん……いいよ。じゃあミニカからどうぞ」

椎野君の声のトーンが若干下がったような気もするがとりあえず回避成功。

「私は結構キャリア長いしリーマスに思い入れ深いんだ。長くなりそうだから椎野君先に言ってみて」

「残念だけど無理だよ。ネトゲに関してはまだ辛い事の方が多いらな」

椎野君は私から目を逸らして溜息混じりに言った。その一言で弾んでいた会話は止まり、場の空気は澱んだものになった。

「ぎゃひー、これってやっぱり私の会話スキルが低すぎるせい？」

元引きこもりの限界か？ そんなつもり全然無かったのに」

「ごう、ごう、ごめんね。そんなつもりじゃ……」

「いいんだ別に。ミニカはしゃべること沢山あるんだろ？ いいよ、どうぞ」

「ううん、私はね……」

私はそこから不自然なほど饒舌に喋った。場の空気を変える為？ ううん、それだけじゃなく。

リーマスへの思いをリアルで語る事は、私自身にとっても大きな癒しだったから。これまでゲーム内でどれほど評価されようとも、現実世界でそれを聞いてくれる者は一人もいなかったから。

自らを鍛え、自分で稼ぎ、他人と協力して何かを為す作業。そのすべてを私はリーマスの世界から学んだ。その世界で私は、賢者、偉人とすら呼ばれるようになった。

リアルマネートレードのことも今日初めて他人に喋った。

椎野君は最初ぼんやりと聞いていたが、私が一所懸命喋ると徐々に笑顔を見せてくれるようになった。最後の方は身を乗り出して、まるで自分のことのように聞いてくれた。

私は生まれて初めて自分の考えをめいっぱい他人に語り、心の底から満足した。

「以上です。ありがとう、全部聞いてくれて」

でも、椎野君自身はどうなんだろう。

「じゃあいよいよ僕の番か。僕にとってリーマスは……」

「リーマスは？」

彼のテンションがいきなり下がる。なんで？ さっきまであんなに楽しそうに聞いてくれてたのに。いったいリーマス内でどれだけ

嫌なことがあったって言うの？

「アイデンティティーであり、且つ悩みの種かな……」

「え〜？ それって良かった事じゃないじゃん」

「仕方ないよ。人それぞれでしょ。僕の場合はそうなの」

「何かないのお……？」

「ところでミニカはリーマス世界が壊されそうになったらどうする？」

「え？ もち、全力で守るケド」

「守れなかったら？」

「はっは〜ん、椎野君。素人さんはそう考える。しかし私はそうは思わない」

「なんでそうは思わないんだよ」

椎野君にまた笑顔が戻ってきた。よ〜し、もう一押し。

「真の実力者には敗北などありえないからだよ。わっはっは」

実は私かなり酔っ払ってるのかな。でもいいや。

「リーマスがなくなればいいと思ってる人だっているかも知れないよ」

「え〜 なんでそういうこと言うの？」

「例えばの話だよ。それならどうする？」

「リーマスの良さを分ってもらうまで小一時間語りまくる」

それを聞いて椎野君は大爆笑。勝ったのか？ 勝ったのか私は？

「ミニカならやりかねないな。小一時間どころか一晩中でも」

「椎野君がネガティブすぎるんだよ。私なら身を挺してでも世界を救うね。下っ端の奴等から順に救っちゃうからねホント」

それを聞いて、椎野君の瞳からスツと熱が消えた。

「リーマスはマルチインターフェイスで視聴覚触覚は殆どリアルと同じになってるんだけど、本当に下っ端から救うなんてできるの？ 自分が傷ついてても？」

椎野君の瞳は無限の深さで私の勇気を試してくる。私はまるで千尋の谷を覗き込んでいるような気持ちになった。

「椎野君、そ、そんなマジにならなくても……出来るわ。たぶんだめだ、せつかく明るく振舞えてたのに元引きこもりの本性が出ちやいそう。」

そこへ店員さんが生中を二つ運んできてくれた。ナイスブレイク店員さん。

「ハイ、じゃあとりあえず乾杯しようか。ミニカ何か無い？」

「え〜と、あの、じゃ、じゃあ、せつかくだから何か考えて、えと、何でもいいから、そ、それに乾杯する？」

何を言ってるんだ私は。声が震える〜 た〜す〜け〜て〜

「んじゃあミニカの勇氣とその勇氣に守られるべき儂き世界に……」
「うわーん、なにそれ？ なんかもまだ若干怒ってる〜」

「せーの……」

「「かんぱ〜い！！」」

なんか涙出てきた〜

その後は会社の愚痴やら社員さんの噂話で盛り上がった。店を出る直前には酔いが回りすぎて私はもう何を言っているのか自分でも分からなくなっていた。

椎野君に別れを告げてなんとかタクシーに転がり込み、運転手に住所を告げるとそこはもう亜空間をさまざましているような夢心地。

時間の感覚まったく無視で途切れ途切れの意識の中、椎野君との話を反芻してた。後半はほとんどがどうでもいいような同僚の噂話だったけど、椎野君自身のこと話してくれたんだよなあ。ええとどんな内容だったっけ。相当お酒が進んでから話し出すんだもん椎野君たら。とても覚えてられないよ。でもかなりプライベートなことも言ってたよな。

ん〜と……

「たしか椎野君とこ、お父さんの会社が潰れて家族がバラバラになっただよな……」

内容は覚えているのに、その場ではその意味するところをまったく理解していなかったというどうしようもない聞き手。あゝ私ってマジ最悪。酔いに任せて彼が傷つくこと言っただけじゃないわね。

「彼自身けつこういいところのお坊ちゃんみたいなのに、不幸にも今みたいな職場で、私みたいなのと一緒に飲んで」

「今みたいな職場でって、会社に対してかな〜り失礼だよなあ。でもまあ派遣だし。」

他の人と飲むときはマジ気をつけなきゃ。私ってアルコールが入ると節制が効かなくなるタイプなのかも。下手すりゃクビだよ。でもこのふんわかした感じ気持ちいい。

このタクシー私のマンションには向かわなくても良いから朝まで走りつづけてくれないかしら。でもそうすると一晩で私の月給吹っ飛んじゃうわね。

あゝ 思考に脈絡ねえゝ

「そんな大変なことがあったのに、何で彼はあんなに良い人であるんでしょう？ まったくの謎です。ハイ、運転手さん、どうしてでしょう？」

運転手さんに絡むなんてほんとにマジ最悪の客だ私。普段は近所のじいさん相手でもあがつちゃうくせして。

「それは彼があなたのことを好きだからじゃないんですか？」

運転手さん最高。社交辞令でも上手すぎる。酔っ払いの私は酒でも言葉でもいまメロメロダヨゝ

「それはない。そんなことはないよ。それに、その気があるなら普通送るでしょ相手の家まで……」

心とは裏腹にわざわざ一度否定する私。

「警戒されると思ったんじゃないですか？ それか何か外せない大事な用事があったとか。」

それに職場が同じ人なら、またいつでも誘えますしね」

「それだ、それ！ いつでも誘えるんだから無理に迫る必要はないよね、ね。そうだよ。たしかに彼なんかいつも忙しそうだし。でも今

日はなぜか誘ってくれたんだよね〜

……のわりにこのあつさりした引き際はなんだあ〜？ こるあ、
しいのトニー！ 出てこい！ おうら！ 出てきて送れよこのお
もつ我ながら何を叫んでるんだか…… 運転手さんごめん。

「トニーさんって言うんですか、変わったお名前ですね。その方に
彼女さんはいらっしやらないんですか？」

「え？」

息を呑む私。

しばし沈黙が流れた。

運転手さんもまずいことを言ったと思ったのだろうか。首をすく
めて萎縮しているのが後部座席からでも分かる。

「え？ 会話の中ですでに聞いているのかと、そのトニーさん彼女い
るとかいないとか……」

「え、えぐ、えぐ……」

何これ、わけがわかんない。目から水が、俗に言う涙が溢れてき
て止まらない。

「ふええ〜〜ん、ふええ〜〜ん、ええ〜〜ん」

まるでいじめっこに泣かされたような泣き方。そうやって泣く私
自身を客観的に見てる私の中の私。

それでも涙は制御できず次から次へと溢れてくる。それをバツク
ミラーで見ている運転手さんはもうまるで犬のおまわりさん状態。

運転手さんマジごめん。でも自分の力じゃあどうしようもないん
だ。

まさに酒の魔力。号泣の魔法にかけられたみたいだ。大魔法使い
の名誉にかけて次回までには酒の解除呪文、酔い覚ましのデスペル
を覚えときますです。

「はい着きましたよ」

自宅前に着いて下車を促されても、私はまだ泣いていた。

まるで耐久レースにチャレンジでもしているかのように、最後は
無理から泣いていた。

なんだよ意地かよこうなったら。しゃくりあげながらもきちんと料金を渡し、ちゃんとお釣りも確認してから降りる私。ほとんどギヤグだよもう。

タクシーが行ってしまい、鍵を開けてマンションに転がり込むと憑き物が落ちたように涙が止まった。そもそも大した理由も無いのに泣きすぎだろ。それか、いろいろなことが一度に起こって神経が昂ぶっていたのか？ その可能性の方がまだ高かろう。

なんせついこの前まで引きこもりの社会不適合者だったのだ。上手く就職出来たからといってすべてをそつ無くこなすなんて出来るわけがない。

必ずどこかにしわ寄せや歪みが出てくるはずだ。じゃないとバランスが取れない。おそらくずいぶん無理してたんだ私。

でも涙を流すような内向きの方法でバランスが保たれるなら安いもんだ。秋葉原に車で突っ込んで他人を傷つけなくちゃバランスを取れないやつもいるんだから。

いや、あれはバランス崩したからああなったのか？ ええいもう良く分からね。

「椎野君家ってそんなに大変な目にあってたんだ……」

自分の口がため息混じりにしゃべり出すのをもつと高いところから靈魂だけで聞いていっているような気分。

「辛いことも過ぎたこととして他人に語れて、明るくやさしく振舞えて、ほんとすごいなあ」

涙が止まったら今度は独り言が次々と溢れてくる。

「ホントに彼、彼女いないんだろうか？ 運転手さんが言ってたとおりだと良いなあ」

そう言っておいて、自分で自分の言葉に赤面した。

独りきりなのを良いことに頭の中身をぼつりぼつり口に出す。誰に聞かれることも無い。口に出すたび少しずつ心が軽くなる。

「都合良く考えすぎると後で現実とのギャップにショックが大きすぎるからね。妄想はほどほどに、慎重に考えなきゃ……」

少しずつ酔いが覚めていく頭を壁にもたせかけ、そのまま床に腰を下ろして中空をぼうつと眺めた。考えを整理しようとするがまったく論理的にならない。

「今彼なにやってるのかなあ。今よりもっともっと分かり合えるようになれば、彼と付き合えるのかなあ……」

彼と付き合う？

独りきりの部屋のなかとはいえこんなことを口に出して言うている自分自身に驚く。

「かつての引きこもりクイーンは新しい魔法を身につけた、か？」

酔いは少しずつ覚めてきたが、興奮しているせいかなかなか眠くならない。

そもそもが夜更かし癖なのだ。本来ならこの程度宵の口。ここ一年以上もこんなに早い時間に寝たことは殆どない。長年の不摂生によつて体内時計が間違つてセットアップされてしまっているんだから眠くなるわけがない。

時刻は深夜。

時間を追うごとに冴えていく意識に観念し、パソコンの電源を入れた。

酒が入っていようが明日仕事があるうが、眠くならないものは仕方がない。

色々なモヤモヤも『リーマス』の世界で憂さ晴らした。

アロウの街角に大魔法使いミニカのヴィジョンが浮び上がった。異世界で尊敬と畏怖を集め、傍若無人に振舞うヴァーチャルなもう一人の私。

この世界のヴァージョンで取得できる限りのハイレベルと呪文数を誇る最強の魔法使い。

漆黒のマントに赤の内張りが翻り、背中に吊った大剣ワルギスが怪しげに揺れる。

街は今日もいつもどおりの喧騒に包まれている。

一般社会が静まり返ったところからオンライン世界はもっとも騒がしくなってくるのだ。

行き交う通りではタスク参加のためのパーティーメンバー集めや武器防具の交換が行われている。

勝手に店を出しているものもある。

ハンティングが性に合わぬと完全に商人に転向してしまったものもある。

酒場のガウも以前は一般プレイヤーだったらしいが、今は一介の情報屋として側面から他のプレイヤーが苦しんだり活躍したりするのを眺めている。まるで隠居じじいだ。

たとえ商人や情報屋でも金だけを集める目的ならやり方次第、戦わなくても十分だ。

『リーマス』の登録者数はぜんぶで150万人超。同時に参加するのはおよそ10万人〜20万人。タスクが一巡した街まですべて含めると人が集まれる街や村は100箇所を超える。これらがすべて自分の顧客になる可能性があるのだ。バトルやタスククリアなんか

よりよっぽど効率の良いビジネスチャンスも隠されている。私はそこまで頭良くないので主にタスククリア専門だが。

さすがにリアルで酔ってるし、バトルやタスククリアは今日は無しかな。みんなを冷やかして回ることにしよう。

甲高い叫び声と群集のどよめき。トリッシュの酒場に向かう私の足を路地裏からの悲鳴が引きとめた。

ストリートファイトをやっているようだ。ただし、ただそれだけなら私の足を止めるには不十分。この手のファイト、中途半端に強くなったときは私もよくやったものだ。が、今では誰を相手にしてもただのいじめになってしまう。

うっかり『リーマス』をやり始めたばかりの新人を半殺しにして身包み剥いでしまうと、彼らはもう二度とログインしてくれなくなるかもしれない。娯楽は他にもたくさんあるのだから。そのため今の私はもっぱら糧を『世界からいただく』ようにしている。

そのとき私の足を止めたのは、もうすでに勝ちまくって失神者の山を築いている人物。顔はマスクで隠され、あだ名・名称の欄もUNKNOWN（設定できる）。そのやり口は残忍無比。もう二度とログインしたくないと思っただ挑戦者も多かつたらう。

一回の掛け金は2万ギル。勝てば倍になるが、失えば初心者にはかなり痛い金額。持ち物で払わされている者も大勢いた。普段なら気にもとめないこの出来事。ただこの数は尋常ではない。さらに奴は、昨日のトニーとまったく同じ背格好で同じ服を着ていた。

「あいつもう一時間以上もやってるんだよ。30人以上はぶっ飛ばしてるんじゃないかな」

隣にいた僧侶風の男が教えてくれた。

「下手に戦闘系じゃなくて良かったよ俺。ひっかかるとこだった」
トニーと同じ服を着た男が私と僧侶が話しているのに気づいた。

腰に左手を当て、胸を張って右手の中指を立てる仕草。勝負に来るよう兆発している。

奴がどのくらいのキャリアか知らないが、もし長くこの世界にいるのなら私のことを知らないわけがない。それを承知で誘っているのだろうか？ いや、ありえん。

基本的に『リーマス』の世界は何でもありだ。

一定の条件下での決闘や賭け事、両者間に了解があれば何をやってもいい。

しかし実力者が、このゲームに参加してまだ間も無い者に結末の見た勝負を持ちかけて金品を巻き上げるとするのは、このゲームを愛する者から見えてどうか？

ある程度以上の実力が備わった者はトリツシユの酒場で参加金を支払ってタスクを買い、それをクリアすることで金品を得るべきだろう。初心者に配慮するのは上級者として当然のノブリスオブリージユ（高位者義務）だと考えられるし、それ以前に私はこのゲームを心底愛しているから。

大魔法使いミニカは普段は保安官を気取るガラじゃ無い。風紀を正すつもりなどさらさら無かった。しかし自分自身が長年青春をかけて積み上げてきたこの世界の倫理を乱されることが、単純に腹立たしかったのだ。

このとき私の脳裏には職場の同僚でさっきまで一緒にいた優男の映像は思い起こされなかった。酔いの所為もあるのかもしれない。

トニーと同じ服を着た仮面の男が顎を軽く突き出す。

二人にとってはそれだけで十分な合図だった。

大剣に手をかけるまでも無い。私は隣のクレリックが持っていた10インチほどの杖を指先でひっかけて投げ放った。ゴングは鳴った。

軽くかわす仮面の男。後ろの壁は弾丸の様に突き立った杖で粉々に打ち砕かれた。その破片が噴煙のように舞い上がるのを振り返ることなく、オープンカフェの小皿を指で挟んでミニカに向けて投げ放つ男。非常に滑らかな動きだ。

空中で受け止めてやろうかと思っただが、そのあまりの威力に危険を感じ、ギリギリのところまで避けて後方へ見送った。

私の直後、皿が当たったところは木材がえぐれ煙が出ている。ありえないだろ。いったいこいつのパラメーターはいくつなんだ？ 私はこの世界最強の魔法使いなんだぞ。

挑戦の掛け声も同意も無い戦い。超高速の投げ物の応酬に、いまだ外野が誰も巻き添えを食らっていないのが不思議なくらいだ。あの威力、破片に当たっただけで低レベルの者なら間違いない『死ぬ』。

「マヌテユオバクル！（魔の過冷却）」

仮面の男がはじめて叫んだ。

周囲で見物していた者達のうち、呪文の意味を知っている者はすぐさま回れ右をして必死の形相で逃げ始めた。間に合わぬと思っただ者達は即座に中和の呪文を口にした。

それでも8割がたはレベルが低過ぎたりそもそも呪文の意味を知らなかったりで、魔法効果の直撃を食らい、そのまま絶命した。

「レビトラ&プロテカ！」

即座に呪文の意味を理解した私はその場で浮揚し、周囲に球形の防護壁を張って魔法効果の進入を食い止めた。

「狂ってる。この状況で過冷却を使うなんて……」

魔の過冷却が恐ろしいのは魔法伝達と効果発現に絶妙な時間差があるところだ。直撃を受けると体表や手足、脳等に先んじて体の中心から凍り始める。術の被害者は動け、また思考できる状態です。2秒間自分の心臓が内部から凍ってつき停止していく様を眺めることになる。その絶望感は想像に難くない。

空中から惨劇を見下ろしつつ私は愕然とした。

武器や魔法の繊細な使用感を得るために、殆どのリーマス利用者がタッチスクリーンインターフェイスを使用している。これは触覚をリアルに近づけるためのもので、健常者でも大ダメージが伝わると激痛のあまり気を失ったりPTSDになったりすることがある。

心停止のおそれもあるため心肺疾患有病者には使用が禁止されているほどだ。直撃で即死したプレイヤーのリアルな健康状態が危惧される。

リーマスでは取引や決闘は自由だが、それには最低限のルールがある。

街を大規模に破壊してはならないし、周囲に大きな影響を及ぼす魔法を使ってはならない。それでは荒野でタスクをこなしているのと同じじゃないか。

「……なるほど、やるな……」

バリアの中にまで仮面の男の声が響き渡ってくる。声にはリバーブがかかり、声紋解析の呪文がつかえなくなっている。

「おまえ何者だ?! 名を名乗れ!」

名乗るつもりなら最初から仮面などしないだろう。我ながら馬鹿げた質問だ。

しかし奴のプロテクトは堅く、私の魔法力をもってしてもおいそれとは突き破れそうも無い。くそう、いますぐ仮面を剥いでトニーじゃないことを確認したい。

もし、万が一椎野君と同一人物だったら…… 私をタクシーに押し込んだ後『リーマス』に乗り込んでやりたい放題荒していたんだとしたら…… 許せないかもしれない、彼を。

街中でのマヌテュオバクルの使用だけでもとんでもない倫理違反だ。いったい管理者は何をやっている?

「……不意打ち以外であなたを倒せる者はかなり少なそうだね。この世界で最強の魔法使いさん」

仮面の男は、私を大魔法使いミニカと知っていてあえて向かってきたのだ。

「あなたの目的はなんなの？」

「……さあね。だいたいあなたの知ったこっちゃない、だろ?」

「目的の無い行動などないわ。言いなさい」

「……あえて言うなら、この腐った世界をぶっ壊すことかな」

その言葉を聞いて私は無性に腹が立った。

「腐ってるってなんで言えるの？」

私はこの世界に救われた人間だ。

当時、引きこもりの社会不適合者浅倉小娘にとって、ここは自身
自身の存在を唯一確認できる所だった。ここで初めて私は他人と会
話し、働き、稼ぎ、そして後輩達にちよつとしたコツなどを伝授し
てきた。入った時期が良かったのもあるだろう。私は運良くこの世
界最強の魔法使いとまで言われるようになった。しかし、いま現在
『そういつた救い』を欲しているのは、まさに最近このゲームに入
つてきたばかりの、仮面男がさつき殺したような連中なんだ。

今、私の目の前にいるこの男。さしてやり込んでいるようにも見
えないのにどう考えても強すぎる。そして強さの源泉がまるで見え
ない。不気味だ。まるで世界の根本原理に触れるかのような怪しげ
な迫力。最高位の私がいまだかつて出会ったことの無い敵。

私のことほどの程度まで知っているのやら。

「表に出ろ！ 試してやる」

とにかくこの男危険だ。戦闘するにしても路地裏ではもてあます。

私は浮遊したまま先に街の外へ飛び出した。

「レビトラー！」

背後で男が浮遊呪文を唱えるのが聞こえる。

少し飛ぶとアロウの街からもっとも近いタスクポイント、ラオル
山が見えてきた。

私はラオル山麓に急降下し、奴が到着するまでの時間差数十秒間
で15個のトラップスペルを瞬く間に張り終えた。これが私の得意
技のひとつ。超高速呪文のため舌先が少しヒリヒリする。ともあれ
準備は万端。

さあこい、仮面の無作法者。格の違いってやつを見せてやる！

仮面野郎は私のすぐ上まできて、いったん上空で待機した。やは
り警戒しているのか？

見上げると、そいつの周りにスペル詠唱前にできる呪念度の濃淡

が発生している。

「まずい！ レビトラー！」

私は再度舞い上がり、超高速でそいつの高度を追い越してさらに上空へ抜けた。眼下ではまさに詠唱が完了するところだ。

「マヌテユオバクル！」

仮面野郎は私が舞い上がるのもかまわず、もともと私が立っていた場所に過冷却を打ち込んだ。

また過冷却か…… マヌテユオバクルのような高等呪文を知っているくせに攻撃自体が単調過ぎる。レベルは高いくせに戦闘経験が不足しているような奇妙な違和感。

奴が過冷却を打ち込んだ所為でせっかく仕掛けたトラップスペルのいくつかは無効化されてしまった。意図的なのかそうでないのか、行動に隠された意図が読みきれない。

「プリンガル！」

私は取り寄せ呪文で奴のベルト後方に魔力のフックをかけ、そのまま急降下して地面の直前で離れた。私自身は再び上空へ、仮面野郎は大音響と粉塵を巻き上げて地面に直撃した。プロテカを張る暇は無かったはず。これはかなりのダメージを期待していい。

仮面野郎が直撃した地面は直径数メートルに亘って抉れ、奴自身は土砂に埋もれてその中心にいた。

もう動けないかと思いきや、粉塵が収まるとそいつはのそりと起き上がった。

動きがおかしい。あれだけの激突の後なのにダメージがあるように見えない。

奴は朝起き抜けの気だるさのように、しかししっかりとした足取りですぐに抉れた穴の縁まで上がってきた。

「素晴らしいタフさ加減だ。しかしいかんせんのろすぎる！」

私は奴に聞こえるようにあえて大声で叫んだ。何の事は無い。私は恐ろしかったのだ。

— 地方の統治者クラスを相手にしても私が恐怖を覚えることは殆

ど無い。

予測できぬ恐怖。この男の恐ろしさは暗闇が持つ恐怖と質が同じなのだ。

私は上空に待機したまま、呪念度の高まった指を立て続けに鳴らした。途端に残ったトラップはほぼ同時に仮面野郎の上に降りそそいだ。

なぜだ？

仮面野郎はまるで罠のほうを避けてくれているかのように慌てず騒がず、平然と地上に戻ってきた。

辺りには空振りでの他の場所に当たって弾けたトラップの魔法煙が立ち昇っている。

まだ10個近くのスペルトラップが残っていたはずなのに、その全てがほぼ同時に炸裂しているはずなのに。私は首筋に氷柱を押し当てられたような寒気を覚えた。

奴は上空にいる私を見て仮面の奥で不敵に笑った。私があわててバリアを張ると仮面野郎の影はフツと薄くなった。しまった。逃げる気だ。

しかし気づいた時にはもう遅かった。私がバリアを解除して追いかけようとするやいなや仮面の男はすでに残像を残して消えていた。

トラップで注意を集め、街中で戦いに誘い、不意をついて使用不可の魔法で急襲。

妙に高度な呪文を知っているかと思えば、使い方が単調でどう見ても戦い慣れしているようには見えない。そしてトラップが効かない。

ある程度試すとすぐさまログアウトして逃げる。計画的かつ大胆。

私の中に当然思い起こされるべき顔と名前、その彼に対する思いが堰を切って溢れ出した。

『こんなの椎野君じゃない！』

大声で叫びたかった。だってついさっきまで一緒に飲んでしゃべ

ってタクシーまで送ってくれたじゃないの。絶対ありえない。それによく考えたら私、椎野君のハンネだつて聞いてない。

昨日会ったオンラインのトニー。同じ会社に勤める椎野大兄。トニーと大兄はまったくの別人で、今日の仮面野郎はオンラインのトニーを騙る偽者？

でも、でも、万が一ひよつとして…… トニーつてそもそも今リアル社会を騒がしている凄腕ハツカーの名でもあるんだよね。

ということはこっちのほうが本当のトニーの姿？ トニーの本性？

でもそんな偶然であるのかしら。いくらでも表示名を変えることが出来る場所にわざわざ同名で現れて目立つ行動取るなんてさっぱり分からない。

ハツカーの愉快犯的行動特性？ それにしたって昨日のトニーと印象が違いすぎる。

もう何がなんだか……

帰ってきたアロウの街路。

考え事をしながら歩く私は周囲からどんな風に見えているのだろうか……

最初遠巻きに見ていた僧侶や魔法使い達は中和魔法を唱えながら周囲を片付けている。

急激に凍らされた机や壁材は割れ、湿って歪んで完全には元に戻りそうもない。

過冷却で即死させられた者達は数十名。殆どはマルチインターフェイスを使用していたはず。プレイヤー達の安否が心配だ。

私は片づけをする者たちにはかまわずその場を離れ、周囲も気にせずうつろな顔でブツブツ独り言を言いながら、そのままトリッシュの酒場に向かった。

タスクをこなすわけでもない。特に目的は無い。とにかくどこか目的地が必要だった。

このままログアウトしたって絶対眠れるわけないんだから。

酒場ではキッドが迎えてくれた。カウンターの周りはタスクを買いにきた客とタスククリアのためにパーティーメンバーを探しにきた客でこつた返している。

酒場とはいえネット上なので実際に酔えるわけではない。

酒場の機能は旅の拠点であり、装備や仲間の補充基地なのだ。

「この時間にガウが来てないなんて珍しいわね。キッド、お留守番ご苦労さん」

私はかわいい仕切り屋さんに声をかけ、ノンプレイヤーキャラ独特のパターン化した返答に耳を傾けていた。

そうしている間にカウンターの向こうの画像が揺らぎ、ガウが口グインしてきた。

私は『助かった』と思った。とにかく話し相手が欲しかったからだ。

ノンプレキャラ相手じゃあ文字通り話にもならない。

「遅かったじゃないのガウ。タイムレコーダー押してくる？」

「勘弁勘弁。仕事が長引いちゃってね。風呂入ってビールの一本も飲むともうこの時間さ」

「まったくムードも何もない返事するんじゃないよ。せつかくファンタジー空間を満喫しに来てるのにぶち壊しじゃないのさ」

私は大魔法使いを気取ってわざと不機嫌に詰った。

しかし本心では生身の話し相手が来てくれたことが心底うれしかった。

私はカウンターに座ってダブルを一杯注文した。情報を得たいときここではみな酒をたのむ。高い酒を頼むほど、おいしい情報や困難で高収入なタスクが提供されるといいう仕組みだ。ただし飲んだからといってライフが戻ったりパラメーターが上がったりすることは一切無い。

「実は南に30キロほど行ったところに『無限の裂孔』と呼ばれる

地割れが存在する」

ガウが仕事モードになって話題を振ってきた。

今回の『アウル街編』になってからもう1年以上が経つ。

小さいタスクは粗方解かれてしまっていて、もうそろそろ本編達成タスクが提示されるころだ。それがどういうものかは達成されるまで誰にも明かされない。

つまり解いて見なければ分からないのだ。

タスクは終盤に近づくほど長く困難なものばかりになってくるので、ふつう同時に複数のタスクに挑戦することはできない。終了間近のタスクはひとつにとりかかると軽く一週間から長いものだと一ヶ月ちかくかかってしまう。

だから終了間近では、タスク名からどれが最終タスクかを推理して取りかからねばならない。最終タスクとそうでないものとの大きな違いは報酬と特権だ。

一時金は他の大きなタスクと似た額だが、最終タスクを解いた者にはその街でのタウンマスターの称号が与えられる。タウンマスターにはその後行われるイベントに優先的に招待されたり、自分でイベントを企画したりする権利が与えられる。つまり後々まで有利な情報で稼がせてくれるというわけだ。それにタウンマスターは参加者全員にその存在が知らされるので、パーティーを組むとき優先的に声をかけられたりアイテムトレードでも一目置かれる。

どうせタスクに取り組むのなら最終タスクを選びたいと誰もが思うのだ。

大魔法使いミニカはすでに7つのタウンマスターを取得している。150万人が参加するこの世界でわずか百数個のタウンタスクのうち単独で7つ持っているのはミニカだけ。

史上最高だ。

この世界に関する限り、私ことミニカは間違い無く最強最高の魔法使いなのである。

『無限の裂孔』タスクを語り終え、ガウが通常モードに戻った。

ガウとはこの街が出来る前からの付き合いだ。教えてもらった良いことはなんでも気さくに聞けるのだがさすがにタウンタスクについてはトップシークレット。絶対に教えてくれはしない。

ガウ自身も昔はタスククリアを狙う一般プレイヤーだったのだが、ある時期から酒場店主兼情報屋の仕事に就くようになったらしい。

リーマス内では他にもショップや仲介屋、代行屋や傭兵など様々なものに転職でき、街の運営にも携われるようになっていく。

ただ、やはり戦士や魔法使いになってタスクをクリアしていくのが本道で最大の楽しみ方であることに疑いはない。

あるいはおそらく情報屋や街のスタッフ自身もゲームの根幹に関わることは教えてもらってはいないのだろう。街のスタッフや便利屋家業は、レベル上げやタスククリアの競争には疲れたけれど何らかの形でこの広大な世界と触れ合っていたい、もしくはいままで一緒だった仲間と離れたくないという人向けのおまけ的なサービスなのだ。

つまりゲームが苦手な人でもいつまでも気軽にログインできて、未永く楽しめる道をちゃんと残してくれてあるのである。

「ありがとガウ。でも実は私今日はリアルで酔っぱらっちゃってるんだ。そろそろ疲れたし眠気も襲ってきたんで今日はもう落ちるわでも近いうちに参加するから今日中に登録だけしといて」

私は目を擦りながらあくび顔でガウに伝えた。

「いいのかい？ 待ってる間にまたラストタスク臭いのが出てくる可能性もあるけど」

「そんなときゃこっちを急いでクリアしてからそっちに向かうよ」

「さすが大魔法使いミニカ様は余裕だねえ」

ガウはいつもこんな風に言っ私をからかう。

「もうがっつかないようにしてるんだ。このタスクも相当難易度が高いことは間違い無いし。タウンタスクを他の奴に持ってかれるなら縁が無かったってことよ」

私はそう言ってマントを右腕で後方になびかせ、踵を返すと店の出入り口に向かって歩き出した。大魔法使いミニカが大剣を揺らしながら歩く姿は周囲に相当なプレッシャーを与えるらしい。私の進行方向の人海がざっと左右に割れた。

それを見て誰かが小声で『まるで水面を割って海底を歩くモーゼのようだ』と形容した。私は気分が良かった。

色々あったがやはりログインして良かった。これで今日は気分良く眠れそうだ。

ストリートファイトのことは明日会社で空き時間にも椎野君に聞いてみよう。あれだけ振る舞いが違うんだからきっと別人だ。

それにしても性質の悪いはずらをする奴がいたもんだ。いつか探し出してお仕置きをしてやらねば。捕まえて吐かせれば今日みたいな事をした理由もはっきりする。

これまでもタウンタスクをクリアしたときなど散々妬み嫉みを受けてきた身だ。なんとなく想像はつく。人生最初のデートの夜に変な疑心暗記に囚われたまま寝るなんてかなりもったいない。なんとなくすっきりしたしこのまま今日は即爆睡だ。

街の喧騒を背中に聞きながら、私は静かにリーマス世界からフェードアウトした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2035z/>

まじっく

2011年12月11日01時46分発行